

【米本美紀さん（たけのこクラブ 常勤専任指導員）】

分科会⑦ （しょうがいのある子どもの理解と学童保育での居場所づくり）

今回、改めてしょうがいのある子どもの支援を勉強したく今回の分科会に決めました。

しょうがいをもつ児童の受け入れ先の少なさ、特に愛知県は少ないという現実に関心が痛くなりました。受け入れが難しい理由には沢山の理由があると思います。支援員不足が一番の原因なのかな？とも感じました。しょうがいをもつ子ども達が、しょうがいのない子ども達の輪に入ることは刺激にもなる反面大きなストレスを与える時もあります。その中で、可能な限り子ども達が生活しやすい環境をつくるのが大切だと感じました。しょうがいのある子ども達にとっても放課後の生活は大切で、気持ちの区切りも必要で寄り道しながら学童に帰宅することも、子ども達にとったら区切りの一つだと感じました。

しょうがいのない子が何気なく乗り越えていくこともなかなか乗り越えられない。しょうがいのない子と比べると、時間や経験の積み重ねが必要なので、私たち支援員は時間がかかっても出来る事を認めることが大切だと思いました。「こだわり」一つも同じで、なぜこだわりを必要とするのか、しょうがいをもつ子どもにとったら「こだわり」はクッション材になっていると知りました。「こだわり」も、子どもの側に立つ私たちが考えることが必要だと改めて気づきました。

今後の現場で「理解」と「環境づくり」を忘れることなく、しょうがいをもつ子どもと向き合い、一緒に生活していきたいと思います。

【納谷藍子さん（たけのこクラブ 保護者）】

分科会⑩ （子どもの心に寄り添い自己肯定感を育む）

「子供を丸ごと愛する」…当たり前のこと、心がけているつもりのこと。それを自分はできているのか？とても基本的なことを振り返る時間になりました。

自己肯定感を膨らませる力は褒めることではない、愛だよ。褒めることは選別すること、物差しで測ること。丸ごと愛していることを示すには子供が主役のストーリーに耳を傾けて共感すること。寄り添うこと。そもそも自分の子供のストーリー（人生）でしょ、興味を持って話を聞きましょうよ。…、分かっているつもりでも、つい、時間に追われていることを言い訳に自分の価値観を押しつけていたことや、他者の判断を恐れて子供を押しさえつける言動をしていたことに私は気づくことができました。そんな反省を同じように共有できた他の保護者の方々の存在は、完璧ではない親だけど、これから改めて自身も成長しながら頑張ろうと思う気持ちの強い励みになりました。また、日々支えてくださっている指導員の方々も同じように悩み、子供の心に寄り添いたいと思ってくださっていることを感じ、心強く思いました。カウンセラーでもある高垣先生のお話は、聞いている者に気づきを与えながら気持ちを楽にさせてくださる、学びある内容であり、このような機会を与えてくださったことに感謝致します。ありがとうございました。

【川原郁美さん（風の子クラブ 常勤専任指導員）】

分科会④ （集団からはみ出してしまう子の保育、問題行動について）

分科会で、気になる行動をする子どもには必ずその行動の理由があり、背景があるということや、子どもの良いところ悪いところ全てを認めて愛することが、その子の存在を認めるということだと学びました。どうしても気になる行動そのものだけを見て、その場で対応し、判断しがちですが一度立ち止まって「この子はなんでこうしたのかな」「なにか困っているのかな」「伝えたいことがあるのかな」などその行動の背景にあるものに目を向けていけるようにしたいと思います。また、子どもに「私はあなたのことが大切で大好きだよ」と伝えられるように、一人ひとりと向き合い、じっくりとかかわって、子どもにとって第二の母親になればいいな、なっていきたいと思いました。

3月6日（日）に第38回あいち学童保育研究集会在、新型コロナウイルス感染拡大防止の為、オンラインで開催されました。NPO 法人岡崎がくどうの会からは、理事長、指導員、保護者を合わせ 44 名の参加でした。今回は、感想を含めたレポートを一部ではありますが紹介させていただきました。

全体会の感想やレポートは載せてありませんが、パラリンピック銅メダリスト大島健吾さんの「結果より過程」の言葉が、多くの受講者に響いたようです。

他の指導員のレポートは、ホームページ(<https://okazakigakudou.jimdofree.com>)に掲載されていますので、お時間のある時にお目通しください。

次回は、6月5日（日）に開催される第46回全国学童保育指導員学校のレポートを掲載します。

【丹村明寿香さん（あおぞらクラブ 保護者）】

分科会⑨ （小学生の SNS との付き合い方）

最近、小学生の子どもが YouTube やゲーム機などに夢中になり、約束をしていた時間を超えてやり続けていたり、今後学年が上がり携帯を持たせる可能性があることから、どのように SNS との付き合い方を考えればよいのかを勉強できればと思い第9分科会を選択しました。

実際に講師である渡辺先生のお話を聞き、基本的な考え方は日常生活での対応と同じであるという事を聞き、SNS だから何か特別な対応が必要であると考えていたので、少し驚きました。

日常生活でも必要となる対応として①リスクについて学ぶ②生活の自主管理（コントロール）③他者とのコミュニケーションのとり方④ものの見方と考え方（リテラシー）とのことでしたが、SNS の世界ではお互いの顔が見えない環境のため、日常生活よりも慎重になる必要があるとのことでした。確かに SNS ではテキストのみでのやり取りとなり、相手の顔や声のニュアンスが分からないため、発言の意図が伝わりにくい状況だと思います。正しく意図が伝わらないことによりトラブルになってしまうことがあるので、絵文字を上手く使う必要があると強く感じたとともに、相手に正しく伝わっていない可能性があることを発信する側も認識しておくことが必要だなと思いました。

また、SNS は危険だからなるべく使わないようにと遠ざけるのではなく、何が危険なのか、もしトラブルに巻き込まれてしまった場合はどのように対応すればよいのかを、子どもと一緒に学ぶ必要があるとのことでした。これは日常生活でも必要なことだと思いますが、SNS の世界では親が把握することが難しい出来事などがあるので、よりしっかりと子どもと学び、理解しておくことが必要だなと強く感じました。

今回の講座を受講し、さっそく家族で SNS について学ぶとともに、SNS 以外にも楽しいことがある、魅力のあるものがあるんだよという事も子どもに伝えていけたらと思いました。

【小杉由紀子さん（なかよしクラブ 保護者）】

分科会⑩ （思春期・反抗期の子どもの“困った…”を面白い！にしよう）

私は『思春期対応』について学びました。

我が子は『思春期』にはまだ達していませんが、いずれ訪れるであろうその時期をどう過ごすことになるのだろうとは考えており、予習的に学ばせていただきました。

講義の中で、思春期は“全能感のオレ様”から“何者でもない自分”へ変化していく時期であり、行きつ戻りつ、揺らぎの中にあるとのお話がありました。

これを前提に考えると、何でもできる絶対的存在であったはずの自分の変化に、子ども自身が慌てて、怯えて、防御するのは当然だなと感じます。

この状況を表現するのに、子どもの表現力をもってすると「クソババア」、「別に」「めんどくさい」になるのだと考えると、かわいらしいなあと感じました。

また、変化にもがき苦しんでいる我が子を見れば助けてやりたくなりそうですが、それこそが最も“マズイ”対応なんだと気がつきました。

子ども自身が失敗し、悩み、やり直し、試行錯誤する機会を奪わずに、思春期ど真ん中を歩いていけるような良い環境として親や大人が存在し、子どもの存在を肯定し続けてあげることなんだと思いました。だとすれば、幼児期と何ら変わることもなく、“思春期だから”と肩に力を入れることはしなくていいのだと、岡崎先生の穏やかな口調をお聴きしながら感じました。

講義のサブタイトルに「子どもの理解と自分を理解すること」とありました。

子どもが変化していく時期、親子関係も上手に変化させていけるように、私も自分自身を理解して変化していきたいと思います。

素晴らしい“気づき”の機会をありがとうございました。

【松井紗輝さん（あおぞらクラブ 非常勤指導員）】

分科会⑦ （しょうがいのある子どもの理解と学童保育での居場所づくり）

分科会ではしょうがいのある子どもについて受講いたしました。やはりそこでも、ダウン症の子のマンガの中で“しょうがいがあるからやらなくていいわけではない”という事が取り上げられていました。イメージがしやすいやり方に工夫をしたり、練習(経験)をしたりすることが必要だと言われました。しょうがいを理解するとは、障害名を理解するだけではなく、その子を取り巻く環境の中でどのような問題が起きているのかを理解することです。その子の“こだわり”をなくすことをこだわっているのは大人であってこだわりをなくすことではなく楽しくできることがキーワードだと教わりました。ここでも出来ることを大人によって出来なくさせてしまわぬようにこだわりよりもっと魅力的な何かを見つけるお手伝いができたらなと感じました。